

■ 安田農地局長一行
牧尾ダム視察

7月25日、農林省安田農地局長、同清野建設部長、同野地灌排課長、同堀技術課長および東大福田教授ら一行が牧尾ダム現場を視察された。(写真は折からの雨中を視察する一行)



(第1話)



安全管理

工事現場はどこでも、事故や傷害を未然に防止するためのさまざまな施設や処置が講じられている。中で一番目につくのがブラカード。文句も色々知恵をしぼっているようだが、十数カ条にわたる注意書などよりピンとくるのは、何といっても標語や寸鉄言のたぐい。中でもケツ作の多いのが牧尾ダム現場で、数ある中にはイキな都々逸調のものまであって、思わず立ち止って読み上げてしまったりする。たとえば“木曾の山奥 見るものないが、見せてやろうよ きれいな職場”といった調子。相当月謝を納めた御仁の作とみたはヒガメか？。もっともあまりケツ作を披露されるのも考えもので、調子のいいのについ首振り立てて口ずさんでいるうち、上の方から固いヤツがゴロゴロシンと落ちてこないともかぎらぬ。たとえ鉄カブトをかぶっていても工事現場での油断はユメユメ禁物というオソマツな垂訓の一席。

(第2話)



守衛さん

鉄カブトといえば、やはりダム現場の話だが、2カ所の現場入口に守衛さんが立っている。正式の役名は何というのか知らないが、とにかくゲンゼンとイカメシク立っていて、たとえば保安帽(鉄カブトのことでアル)をかぶらずに侵入しようとする軽卒なヤカラなどがあると、たちまちストップを食わす。そして出入りの度ごとに挙手注目というアリガタイ敬礼を下さるのである。慣れないうちはドギマギしたりテレたりして何とも格好のつかないことおびたしいが、兵隊にいった経験のあるアバゲルなら、この時ちっともサワガズ、サッと鮮やかに答礼してちよっと胸をはったりする。そして思うらく“アアかつてはこの国にも軍隊などという動物的な人間修練道場があったっけナ”と懐しむ心境になったりする。しかし考えてみると、こんな風に敬礼されてイイ気分になるというのも、あんな折目正しい敬礼というのが、今の日本ではスッカリすたれてしまったセイに違いないからであろう。たとえ形式であっても、“折目スジメ”というものは、いつの世にも忘れられてはならない秩序を保つためのオキテみたいなものかも知れぬ。(トコロでつまらぬことをきくようだが、あの守衛さん、兵隊の位でいえばどのへんになるのかネ?—軍曹くらいかな)

(第3話)



紳士的

折目正しいといえば、兼見トンネル現場での話。工事現場といえどかく殺風景なもの、鬼をもヒシク荒くれ男の集まり、といった風には人は考えたがる。(三文小説やミーハー映画の責任ですゾ)しかし現代は必ずしもそうではないのであって、特に一流業者ともなれば、風体面相は土方然としていても“色は黒いが気は優しく”態度言語ものやわらかい紳士的な人も少なくないことを、ハッキリいっておかねばならぬ。閑話休題、兼見トンネルの現場に初めていって見たとき、接する人のほとんがすこぶる紳士的なのにちよっとおどろかされた。またこのような現場にかぎって、現場環境はまことにサッパリと整頓されているし、工事の進み具合もスムーズにいっているようにみえるのである。(事実もそのとおりだったが)上は所長から下は1人1人の労働者に至るまで、何か一本シンが通っているという感じ、きいてみると着工以来いまだに無事故だという。サモアリナンと再び感じ入った次第であるが、ねがはくば、その謙譲とその団結、そしてさらに無事故を工事完成の日まで、変ることなく持続されんことを——。

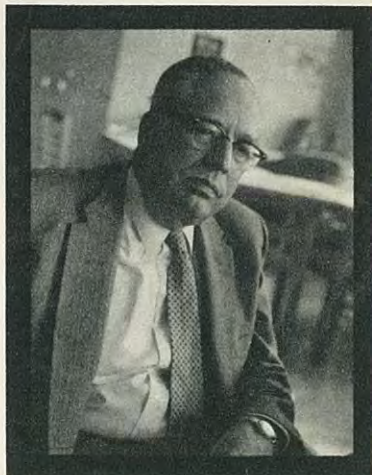
(第4話)



「微結」

団結といえば、やはり同じ兼見現場の話。この現場詰所ではどこにいても、「微結」(「団結」の誤植にあらず)と大書された額が掲げられていて、朝な夕なこの二字が眼の中に入ってくるシカケになっておる。これを見てガクのない連中が首をかしげる。「微結って一体何だい?」「字の意味からいうと“微かに結ぶ”ってことだネ」まさかね、源氏物語じゃあるまいし、「ソコハカとなく結ばれる”ってのはおかしいや」「少くとも工事現場のモットーとしてはいささか妙であるネ」などとカマビスしいきわみだがどうにも納得しかねる表情。たまりかねて責任者にきいてみると、これなん「微粒結集」をはしよったもの、意識すれば「ビョウタラ微粒といえども結集すれば偉大な力を発揮する」という意味である由。きけばナルホドだが、それにしても聞き慣れぬ言葉なのでイワレをたずねてみると、これは間組神林社長の座右の銘で、掲額も同社長の直筆である由。ともあれ、この極端にムダを省いた言葉の背後にあるものは、現場できたえ上げた脈々たる土性骨であるといっているのである。そしてカンジンなもの、まさにこの一点なのである。(カゲの声“この「微結」公団職員も、もって他山の石とすべし”)

E. F. A
フロア社長死去



E. F. A社長エリック・フロア氏(68)は、さる7月13日、動脈結セン(栓)のため突如死去された。同氏はデンマーク生れの米国人で、土木建設事業に40年の経験をもつ技術者。技術協定締結後2度来日している。なお公団に対する技術援助業務は、フロア氏の死去によって支障を来すようなことはない。



■ 中部経済圏確立と愛知県地方
計画の実現推進激励大会開催

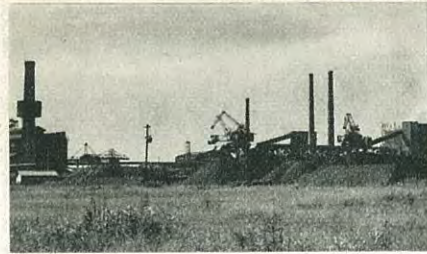
6月26日、愛知県文化会館1階ホールで開催された同大会に招かれた大津副総裁は、事業の現況を説明した上、今後の事業推進について各界の支援と協力を要請するあいさつを行って、同大会の愛知用水事業に対する強い要望に応えた。

■ 市町村用地対策委員会開催

7月4日、幹支線水路の全面着工に備えて用地対策の万全を期するため、全地域の市町村長を招いて委員会を開催、用地問題について種々意見を交換した。(写真は委員会席上で挨拶する大津副総裁)



目 耳 録



(第5話)

工業用水

カンジんなことといえばこんな話がある。
 某日、大阪のある著名な小中学校用の教材出版会社から、愛知用水に関する資料と写真を提供してほしいと申込んできた。何でもシリーズで出す地理大系の掛図にぜひ掲載したいからと、いうことで、前置のアイサツまではまことに結構であった。が、そのあとがイケマセン。曰く“愛知用水は工業用水を主目的とした本邦最初の総合開発事業である点を強調し” ウンヌンとある。
 当公団としてはシンガイに堪えんので折り返して、教材出版会社ともあろうものが何たる認識不足でアルかと、とりあえず戒めの返事を出しておいたが、その後ウンともスンともいってこない。ところをみると、ガクゼンとして急きよ編集プランを変更したのかも知れないが、それにしても無定見な話である。
 工業用水については、最近東海製鉄の愛知県誘致運動がはげしく、これに必要な工業用水を愛知用水に仰ぐなどということが誠にやかに伝えられている。誘致の最後の切札は、工業用水と工場敷地の確保という2点にあるらしいから、関係者が血眼になるのも分らないではないが、それはともかくとして筋のとった副総裁の言明をとらえて“愛知用水がこの問題に関して非協力的なのはまことにイカンである” などとフンガイしている向もあるやにきくのはまことにイカンである。
 今さら開き直ってというほどのこともないが、愛知用水事業の主目的はあくまで農業開発にあり、まして工業用水のために事業計画を大中に改変するなどということは、とてものこと乗れる相談ではない。世の中には“アトのかりがサキになった”などというウマイ話もないではないが、国家的な事業だけに筋道だけは一応も二応もハッキリさせておくべきで、これは愛知用水の将来のためにも大事なことでありと考える次第。

目 耳 録



編集手帖

■グラフ第2号をお届けいたします。本号は特に全面着工を記念して増頁しましたが、次号から再び旧に復します。
 ■1号発行後、内外各方面から色々の御教示と励ましを頂きました。厚く御礼申し上げます。あわせて、せつかくの御教示を頂きながら本号ではその全部を実現し得なかったことをお詫び申し上げます。また前号には誤植が5・6カ所ありましたが、この不注意もお許し下さい。

■本号の取材にあたって、堰堤事業所、工務部援助技術課、同開発課の皆さんには特にお世話になりました。誌上をかりてお礼申し上げます。なお各部所の皆さんもいい材料がありましたら、さっそく御連絡頂きたいと存じます。本号にも御提供のプランをとり上げたものが2・3ありますので念のため申添えます。

目 耳 録



(第6話)

楽屋話

筋といえば、これは記録映画のはなし。
 一体記録映画の筋ってものはおうむねの場合、アルがごとくナキがごとく、さながら本殿の奥にアエカに鎮座します御神体のごときものといいていい。プロット(構成)はあるが、劇映画におけるようなストーリーの設定はむずかしい。だから記録映画のシナリオ(厳密には構成案というべきであろう)は、劇映画のそれとちがって、読んでおもしろいというシロモノではない。
 ダムの建設状況を語るシーンを例にとれば、本(脚本のこと)の上ではただの一行「動いている機械からカメラゆるやかに下流部へパン」と書かれてあるだけ。これでは、かの代議士候補者の演説草稿における【ここで水を呑む】という注りよおもしろくないであろう。しかしこれをフィルムにして、スクリーンに映し出してみると、ガゼンおもしろく見ごたえのあるものになっている(ことが多いのでアル)。まず耳をロウするばかりの建設機械の活躍に、観客はしばし、カタズをのむ。と、画面静かに移動しはじめて轟音も次第に遠ざかり、それにつれてダムサイトの全景がアリアリと展開される。最後に山気深く立ちこめる峡谷の美、そしてさわやかな溪流の音…テナ具合である。素人衆がこれを見て“オッ、何とイカスではナイカ!”とくる寸法。
 だから記録映画製作の苦心、と同時にそのダイゴ味は、最終段階の作業である編集と録音にあるといいていい。
 タダの一行の撮影メモに秘められた演出者のイメージが、ここではじめて美しく開花し再現するわけである。(ただしクロウトは以上のような楽屋話をしないものである。どだい筆者がシロウトなものでかくはトクトクと御説明申上げる次第——) (Y)

目 耳 録

■それから記録映画の製作もその後々進行しておりますが、現場での撮影にあたっては色々御迷惑をおかけしていることと存じます。作業の邪魔にならぬよう極力注意はしていますが、白黒とちがってカラー撮影には相当の準備時間が必要です。この点を御理解の上、今後ともよろしく御高配のほどをグラフ同様お願申上げる次第です。
 ■グラフ3号は大体11月初め頃出したいと考えております。本号の御批判とよきプランの御提供をお待ちしております。 (Y)

非 売 品

昭和33年 8月1日印刷発行
 発行 愛 知 用 水 公 団

名古屋市中区南外堀町6の1
 (電話 代表 7541)

印刷 弘益印刷株式会社

愛知用水事業概要図

